

タイトルから余り面白そうではなさそうと思った。だが読んでみると、しみじみすることがたくさん書いてあって面白かった。

家の前の道路では、時折数人の少年が、「ギブミー・ガム、ギブミー・チョコ」と叫びながら、アメリカ兵が乗っているジープを追いかけていた。アメリカ兵は少年たちを焦らせながら、ガムやチョコレートを放り投げる。地面に落ちたガムを拾おうとして、手を伸ばす少年たち。拾い損ねた少年は、さらにジープを追いかける。彼らは、動物園の猿そのものだった。

生徒たちは毎月決まった日に、給食費が入った袋を学校に持参することになっていた。それを受け取った先生は、中身を確認したうえで、袋にはんこを押して生徒に戻す。ところが私の母は、催促しても指定日にお金を渡してくれなかった。クラスの中で二人だけ給食費を持参しない生徒に、担任の先生は怖い顔で詰問した。

「給食費を持って来ないと、吉田のように給食が食べられなくなるぞ」

「少し待ってください。父があとで持ってくると言っていました」

父は数日後に、大学からの帰り道に職員室に立ち寄って、給食費を払った。一回だけならともかく、次の月も、そのまた次の月も同じことが繰り返された。先生は思っただろう。「こいつのおやじは、息子にお金に渡すと、買い食いすると思っているのではないか」と。少年の面目は丸潰れである。

たしかに私は悪ガキだった。しかし、命綱である給食が食べられなくなるようなアホなことは、「絶対に」やらない。

ことの真相はこうである。集金日が月給日直前にあたっていたため、わが家には、今で言えば二〇〇〇円程度のお金を払う余裕がなかったのである。集金日が巡ってくるたびに、少年はおカネを渡してくれない母を恨んだ。

恨んでいたのは、それだけではない。母は一度たりとも、授業参観や父母面談に来てくれなかった。たまに父が参観にやってくると、ヒソヒソ声が漏れた（男親は一人だけだった）。だから担任の先生や同級生たちは、私を「母なき子」だと思っていたようだ。

では母は病気だったのでしょうか。それとも勤めに出ていたのでしょうか。いいえ。どちらでもありません。母は授業参観や父母面談をパスして、左翼グループが主宰する「『資本論』勉強会」に出ていたのです。

息子よりマルクスの方が大事な母は、息子がジフテリアに罹って三九度の熱を出した時も、マルクス先生を優先させた。後年、「マルクス思想を信奉する母親を持つ少年は、非行に走りやすい」という右派論客の文章を読んだ私は、妙に納得したのでした。

父は月給が出ると、息子を近所のソバ屋に連れて行ってくれた。注文するのは、いつもかけそば一杯である。「おれは家に帰ってから、今朝茹でた麦を食べるかから、お前が全部食べろ」という言葉を真に受け、「おやじはソバより茹でた麦の方が好きなんだ」と思った少年は、一人で全部食べておつゆも残さず飲みほした。

父の死後、『一杯のかけそば』という小説がベストセラーになった時、あの時父が何を思っていたかを考え、父と同じ年ごろになった私は、胸を締め付けられた。

一年間の捨て子生活で、私は母に対する信頼と愛情を失った。辛い毎日に耐えることができたのは、学校に行けば、ルノワールの「イレヌ・カーンダンベール嬢の肖像」に描かれた、長い髪のお姫様に会うことができたからである。一年間の捨て子生活を送った少年は、小学校を卒業するころには、“イレヌがいてくれれば、母はいなくても構わない”と思うようになっていた。

~~~~~

ルノワール「イレヌ・カーン・ダンヴェール嬢」 ～絵画史上もっとも有名な美少女の数奇な運命～



~~~~~

「魚菜学園」の家庭料理コースに通う母が、クラゲの酢の物、スコッチ・エッグ、鮭のマリネといったファンシー料理を持ち帰った際に、三つ年上の兄が、「どうせ家では、こんなものは作らないんだから、まずはごはんの炊き方を教わるべきじゃないか」と言ったのに対して、弟が「そうだ、そうだ」と尻馬に乗った時の怒髪天を衝く怒りが、トラウマになっていたからである。

「私のごはんについて、お前たちにあれこれ言う資格がありますか！ 私はね、本当は医者になりたかったのに、二〇年間家事、育児、内職ばかりして来たんですよ。私の料理にケチをつけるなら、これからは自分で作りなさい！ 働かざる者食うべからず。ドンドン（机を叩く音）」

母を怒らせないように、息子たちは出てくるものを何でも黙って食べた。だから七六歳になった今も、ナマコと蜂の子以外に食べられない物はない（ずっと嫌いだっただナスも、独居寡夫になってから食べられるようになった）。好き嫌いなく、何でもよく食べる夫を持った妻は、夫をそうしつけた義母について「おかあ様には感謝しているわ」と言っていた。

しかし、母が常々「法学部は権力者の手先。経済学部は資本家の手先。文学部は非国民の集まり。理学部以外は大学じゃありません」と言っていたので、文系に進むわけにはいかなかった。

世の中で、食べ物の恨みほど恐ろしいものはない。ケンカの原因が自分の弁当にあることを知っている娘は、いがみ合う三人の間に小さくなって暮らしていた。

では、喧嘩のもとになった弁当とは、どのようなものか。驚くなかれ、これが**毎日カジキのフライが一枚だけ入った弁当**なのである。海苔、梅干し、佃煮、福神漬けなどの付け合わせは一切なしである。

祖母は、毎日洋品店の真向かいにある惣菜屋で、一枚一五円のカジキ・フライを買ってくる。カジキのフライがあるなら、イカのフライやアジのてんぷらもあるだろうに、祖母はそれらには目もくれず、(単位コストあたり最も食べ出がある)カジキのフライを選んだのである。

女子高校生は、友達と一緒に弁当を食べる生き物である。当然、相手の弁当の中身が目に入る。弁当を見れば、家の経済状態が分かる。「友達が見ている前で、毎日毎日カジキ・フライ一枚だけの弁当を食べる少女」。

私はいかに母親が怖くても、「毎日同じものはやめてほしい」と頼んだだろう。しかし娘は、決してそのような要求を口に出さなかった。たとえ毎日同じものでも、お弁当を作ってくれる祖母に感謝していたと言う。

結婚後にこの話を聞いた私は、心から妻に同情した。今にしてつくづく思うのだが、**妻は本当に「要求の少ない女」だった。**

十数年後、「マグロには1ppmを超える水銀が含まれているので、大量摂取は控えた方がいい」という新聞記事を読んだ私は、妻の体内にどれだけの水銀が蓄積されたかを計算してみた。

一〇〇グラムのマグロを、年に二〇〇回食べたとすると、トータルで二〇キロ、二年間だと四〇キロになる。マグロに含まれる**水銀が5ppmだとしても**、二年で〇.二グラムに過ぎない。摂取したものがすべて蓄積されるわけではないから、心配する必要はないと一安心した(しかし、後年妻が心室頻拍という難病を発症したのは、水銀のせいかもしれない)。

「あなたが家を出たら、お母さまが悲しむでしょう」

「どうでしょうか。母は**工学部を職人養成機関**だと見下しています。母にとっては、理学部以外は大学ではないのです。毎日バカにされて暮らすのは、もうごめんなんです」

女性にはボリュームがあり過ぎた。新婚女性は人前で大食いはしない。ましてや**五人の女性は、互いに反目しつつも、国立大学卒の女性を見下している、御三家(双葉、東洋英和、白百合)の出身者**である。

リッチなニューイヤー・パーティー

この当時の私は、筑波に住んでいる限りホスト役が回って来ることはない、とタカをくくっていた。「正月二日に、都心から六〇キロも離れた陸の孤島で新年会を開くことは、金輪際あり得ない」。

一方、都内在住のメンバーの中には、いずれ当番が回ってくることを警戒して、**出席を見合わせる人が出てきた。要職に就いた、一ダースを超える「うるさ方」を、奥方に接待させることは避けたい、**と考える人がいても不思議はない。

(略)

一五品もの料理を十六人分準備するのがどれほど大変かは、誰にでも分かるからである。妻はこの日のために、三〇年にわたる専業主婦としてのキャリアのすべてをつぎ込んだのである。このあと二日

間、私は家族会計学に則り、妻と娘に大サービスした。

五年後には、二度目の登板が回ってくるはずだった。それを考慮して、特別予算を組んで、上物のお皿やカップなどを買ひ揃えた。皿の裏を眺めて、ブランドものかどうかを確かめる輩がいるので、十分に気と金を使ったのである。

しかし日本では、そのようなことは起こらなかった。重複する部分が多い「日本 OR 学会」、「日本経営工学会」、「日本経営情報学会」、「日本品質管理学会」などは、大同団結した方が良かったと思われるが、互いに牽制しあってじり貧への道をたどった。

OR 学会の最大の収入源は、会員が支払う年会費である。個人会員は年一四、四〇〇円、法人の賛助会費は A と B の二種類があって、A は年一〇万円、B は五万円である。

二〇年前には個人会員が三〇〇〇人、法人会員が約一二〇社あったから、その他の事業収入を合わせると、五〇〇〇万円近い年収があった。ところが最近では、個人会員が二〇〇〇人、法人会員が六〇社に減ったため、三〇〇〇万円に落ちてしまった。

OR というのは、“数理的手法を用いて、個人や組織（企業、政府）の意思決定問題を分析し、解決に導くこと”を旨とする学問である。この定義から明らかな通り、OR は経済学や経営学と密接なつながりがある。実際、第二次世界大戦直後の黎明期には、数学者と経済学者が協力して、OR を育ててきたのである。

六〇年代に入ると、経済学と OR は袂を分かち別々の道を歩き始めた。ところが、経済学者の中には、依然として OR 学会に足場を持つ人がいた。

経済学者は、原理原則を大事にし、細かいことまでゆるがせにしない生き物である。これは尊敬に値する。しかし、時間をやりくりしてやってくる理事諸氏のことを考えれば、会議は予定時間以内に終わらせなくてはならない。

特に遠方（関西や九州）から来る人は、汽車や飛行機の時間が気になる。こういう時にエンジニアは、原理原則を曲げて妥協する（はっきり言えば、役に立ちさえすればよしと考えるエンジニアには、原理原則と呼べるようなものはほとんどない）。

ところが、エンジニアが最後は妥協することを知っている経済学者は、なかなか妥協しない。かくして議論は延々と続き、最後は経済学者の勝利で終わる。

政府はこの批判にこたえるため、“公務員が接待を受けることを全面禁止する”という通達を出した。たかが一〇〇〇円程度の弁当を食べても、この通達に引っかかるというわけである。

私は国家公務員であるにもかかわらず、民間人である私立大学教授とともに、素知らぬ顔で弁当を食べた。一〇〇〇円程度の弁当を食べただけで接待を受けた、と思う国民はいないだろう。しかし賢い役人は、弁当を辞退することによって、（以下に説明するような）より大きな権益を守ったのである。

この研究会を主宰する X 研究所には、専任研究員はほとんどいない。いるのは役所から天下った理事長と四～五人の理事、そして二人の研究員と秘書である。

彼らのビジネスモデルは、以下の通りである。理事たちが、古巣のお役所から研究委託を受け、それをかねてから懇意の大学教授（有力大学の御用学者）にマル投げする。マル投げされた教授（委員長）

は、あちこちの大学の若手研究者に声を掛け、月に一回、合計六回ほどの研究会を開催する。

研究会と言っても、委員が一時間ほど話をして、他の委員がコメントする程度のカジュアルなものである。委員月手当ては、一回（二時間少々）あたり二万円から三万円だから、六回だと約一五万円になる。

六回の研究会のあと、各委員が分担して報告書を書く。原稿料は一枚当たり三〇〇〇円だから、四〇枚書けば一二万円。委員謝礼と合わせると約三〇万円。研究会を三つ掛け持ちすれば一〇〇万円になる。何でもござれの経済学者にとって、研究会を三つ梯子するなど朝飯前である。若手助教授にとっては、大学からもらう給料の一五%を超える副収入である。

委員長がイントロダクションを書いて、事務局に提出する。事務局は、これをそのまま印刷・製本して、依頼元の役所に提出する。研究所の仕事は、これでおしまいである。この報告書を読むのは、依頼元のお役人（二人か三人？）と何人かのヒマ人である。中には立派な報告書もあるが、大抵は書き流しだから、読んでも得るところは少ない。

ところがこのプロジェクトには、役所からおよそ三〇〇〇万円程度の研究委託費が出ている。委員長謝礼が一〇〇万円（このあたりの数字はよく分からない）、委員謝礼が六人分で一八〇万円、印刷費が仮に二〇万円とすると、総経費は高々三〇〇万円である。

一〇個の研究会があれば、委託金が三億円、必要経費が三〇〇〇万円。残りの二億七〇〇〇万円は、都心の二等地にあるオフィスの賃貸料と理事の給料で消える。二〇個の研究会をオーガナイズすれば、収入は五億円を超える。

かくして理事長は二〇〇〇万、理事も一〇〇〇万円を大幅に上回る高給をエンジョイし、三年後に退任するときには、一億円近い退職金を手に入れる。退任したあとは、別の外郭団体に移籍する。世に言う「渡り鳥」である。

点滴と熱心なリハビリにもかかわらず、妻の運動機能は徐々に衰えていった。そして、二一世紀に入って間もなく、リハビリ中に転倒して股関節を脱臼したのが原因で、車いす生活になってしまった。

結婚して以来四〇年近く、「あなた作る人、わたし食べる人」という言葉の通り、私は食べる専門家だった。日本では「食べるだけの夫」は、妻に嫌われるそうだ。しかし、アメリカでの良い夫の条件は、一にストマック、二にストマック、そして三、四がなくて五にストマックだと言われていた。つまり妻が作ったものを何でもバクバク食べて、皿洗いに協力するのが、いい夫なのである。

ところが六二歳にして立場は逆転し、「わたし作る人、あなた食べる人」の時代がやってきたのである。

しばらく前に、「日本で一番おいしい親子丼を食べさせる」と称する神田のお店で、友人たちと会食したことがある。どれほどおいしいのかと思いきや、自分が作ったものと大した違いはなかった。そもそも、親子丼なるものは、お好み焼きやラーメンと同様、日本一とか何だとか言うような、大仰な食べ物ではないのである。

巷では、クおかあさんやすめ（オムレツ、カレー、サンドイッチ、焼きソバ、スパゲッティ、目玉焼き）が、お母さんの六大手抜き料理だと言われている。しかし、なかなかうまくできないオムレツの代わりに、親子丼を入れるべきではなかろうか（ただしオムレツも、容姿さえ気にしなければ、簡単においしいものができる）。

なお、作ってみて分かったことは、サンドイッチは意外に面倒だということである。その上頑張ってみても、セブンイレブンには叶わない（コンビニの努力には頭が下がる）。

エンジニアとしての素質がない男が、至近距離から見る東工大のスーパー・エンジニアは、神様のような人たちだった。劣等感をひた隠しにして一九年を過ごした私は、定年退職したあと食事づくりをするようになって、五〇年に及ぶ劣等感が少しばかり薄らいだ。

東工大教授は、モノづくりのチャンピオンである。しかし彼らの大半は、こと食事に関しては、作る人を経験することなく、食べる人として一生を終えるはずだ。彼らがどう考えるかはともかく、料理は紛れもないモノづくりである。

最近、仕事に熱中し過ぎて、定年と同時に離縁される熟年教授が相当数いるという話だが、機械や電気のような高級なことをやってきた人が、料理のような「低次元な」ことを、本気でやるとは思えない。

おそらく彼らは、一人暮らしになったあとは、毎日コンビニ弁当やレトルト食品（のようなもの）を食べて暮らし、短命に終わるのではなからうか。一方奥さんが健在な退役エンジニアは、作る人を志願したりはしない。

一方、妻の病気のおかげで、ものづくりエンジニア・コンプレックスから脱け出した私は、まともな食生活のおかげで長生きできるはずだ。その上作る人には、食べる人がお皿を空にしてくれる時に味わう満足感がある。

尊敬する N 教授（慶応大学）は、「幼くして亡くなった弟の思い出は、母が作ったロールキャベツと、精養軒のアイスクリームに重なる」と言っていた。そうなのだ。愛していた人の思い出は、一緒に食べた物とつながっているのである。

心室瀬拍は、薬のおかげで小康状態を保っていた。ところが二〇〇二年四月に、定例検診を受けに行った病院で発作が起こり、緊急入院と相成った。心臓手術を受けた結果、妻は一〇年ぶりに不整脈から解放された。

しかし、二週間の入院生活の間に、運動機能は大幅に低下していた。その後、しばしば転倒したり物を落とすようになったため、二〇〇三年春に医師の診断を受け、要介護度二の認定を受けた。「独立歩行は難しいが、手すりを伝われば移動できる。独力でご飯を食べることが出来て、寝返りも打てる」。これが要介護度二の条件である。

一日につき、二時間分の介護費用が支給されることになったおかげで、毎日お昼にヘルパーさんが来てくれることになった（このおかげで、セブンイレブンの宅配サービスが復活した）。

セレジストという新薬のおかげで、難病の進行スピードは抑えられていた。それでも症状は次第に悪化し、二〇〇五年には、何とか寝返りが打てるが、手すりを伝わっても、移動することが出来なくなった。

この結果妻は、要介護度三の認定を受けた。介護補助が週二〇時間に増えたため、ウィークデーは朝九時から一〇時まで、一二時から二時まで、四時から五時までヘルパーさんに来てもらった。夫は遅くとも六時半までには家に戻り、夕食の介助、夜間と早朝の介護にあたった。

仕事との両立は徐々に難しくなったが、できる限り仕事を減らして、これから先も自宅で介護を続けるつもりだった。ところが二〇〇七年になって、二つの大事件が起こった。

一つ目は「コムスン事件」である。介護保険料の不正請求で免許停止処分を受けた最大手のコムスン社が、介護ビジネスから撤退してしまったのである。コムスンの仕事を肩代わりしたのは、それまで妻がお世話になってきた、業界第二位の「ニチイ学館」である。これを機に、過重労働を警戒したヘルパーさんが、大量退職してしまった。

ここに第二の事件が起こる。不慣れな看護師が、ベッドから車いすに移動させる際に、妻を床に落としてしまったのである。痛み止めの「ボルタレン」を投与しても、効果は二時間も持たない。医者は内臓に悪影響が出るという理由で、いくら頼んでも量を増やしてくれない。泣き叫ぶ妻と二人きりで過ごす、週末の六〇時間は地獄だった。

「カレー&アルコール新年会」に端を発したニューイヤー・パーティーは、二一世紀に入ってからも続いた。当初からのメンバーは、あれこれ健康に問題を抱えるようになったが、皆ひとまず自立した生活を送っていた。

失うものが増えてからは、車ではなく電車で行くようになったため、酒量はさらに増えた。酒量に伴って食べる量も増えた。一晩で体重が二キロ近く増えたこともある（その後一週間以上ひもじい思いをした）。

還暦を過ぎたあと、最初からの五人のメンバーの中で必ず出席するのは、義理堅い江藤と、長老格の春山だけになった。荒木や栗林は、現役を退いた後は姿を見せなくなったし、かつては体力抜群だった佐藤も、体調不具合を理由に欠席がちになった。

二〇〇一年からの一〇年間に、私が出席したのは三回だけである。特に介護施設に入ってから、欠席が続いた。

二〇一一年四月三日、「あなたが定年になるまでは生きていたい」と言っていた妻は、その目的を果たした三日後に逝った。死亡診断書に記載された死因は、呼吸不全だった。一〇年の余命と宣告さ

14

ながらも一五年間生き続け、古希を迎えることができたのは奇跡である。
二〇一二年一月二日、独居老人は一〇年ぶりに、春山の家で開かれた新年会に出席した。年末に届いた案内状によれば、四〇年続いた回り持ち新年会は、これが最後になるということだった。欠席すれば、体調を崩した（うつ病になった）と思われる。実際、歳をとってから連れ合いを亡くし、「孤食」生活を続けると、うつ病になる人が多い。老人がうつになると、肺炎同様まず治らない。

工学部の語り部

六七歳を回ったころ、若くして世を去った白川教授が残して行った問題が解けた。「絶対に解けない」と思っていた難問である。そしてそれ以来、私は研究に対する情熱を失った。「もうやるべきことはやった」と思うようになったのである。

知り合いの中には、古希を過ぎても研究を続け、素晴らしい成果を上げている人もいる。しかし、それは稀有な例外である。かつて世界的研究者と呼ばれた人でも、七〇歳を超えてから書いた論文の中には、後輩たちを当惑させるものが多い。

だから私は、二度目の定年を迎える七〇歳以降は、研究からきっぱり手を切ろうと思っていた。現役中に書いた論文の改訂作業や、古くからの友人の依頼で、論文の審査を引き受けることはあるとしても、新しい論文は書かないことに決めたのである。

こう書くと、潔い男だと思われるだろう。しかし、本当のことを言えば、書かないのではなく、書けないのである。独創性が乏しくなった上に、研究室も研究費も学生も、そして秘書もない工学部名誉教授は、論文を書きたくても書けないのである（いまさら細かい活字の英文論文やTextと格闘するのは、御免蒙りたい）。

それでは、email、ツイッター、フェイスブック、モバゲーなどで、暇つぶしをしていたのか。答えは再びノーである。

元工学部教授の大半（特に実験系の教授）は、散歩以外にはやることがない。では私は何をやっているのか。答えは、時間はかかるがお金がかからない、「もの書き」という仕事である。ここで必要なものは、「分析力、編集力、虚言力」の三つである。

若くしてノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士（元筑波大学学長）は、「理工系研究者の独創性は七〇歳でゼロになる。その一方で、分析力は年齢とともに上昇を続ける」と言っている。

もちろん物書きでも、『モンテ・クリスト伯』や『レ・ミゼラブル』のようなフィクションの場合は、独創性が絶対に必要である。しかし、事実をもとにしたノンフィクションであれば、独創性は脳みその中に僅かに残っている残存物を捻り出す程度で足りる。

「編集力」とは、多くの素材を、「起・承・転・結」がある、一つのまとまったストーリーに組み立てる力で、独創性とは異なる能力である。

三つ目の「虚言力」とは、素材を脚色して面白い物語を作り上げる能力、別の言葉で言えば、ウソをつく能力である。この能力は各人固有のもので、嘘つきはいくらでも嘘をつけるし、つけない人は全くつけない。

小学生時代の私は、自他ともに認める嘘つき少年だった。でたらめな物語をでっち上げ、即興で友人たちを楽しませ、母を呆れさせた。嘘つき息子に手を焼いた母はいつも、「お前は生まれつきの嘘つきだから、手が後ろに回らなければいいんだけどねえ」と言っていた。

しかし、高校受験に失敗して、それまでの生き方を猛省した男は、虚言力を押し殺して六〇年を過ごした。押さえつけられた才能は死んでしまったと思っていた。ところが、三〇〇〇年前のハスの種が花を咲かせたように、かろうじて生き残っていた虚言力に、毎日せつせと水を掛けたおかげで、再び芽を出したこの生き物は、少しずつ元気を取り戻している。

毎日八時間も書くことがあるのかと言えば、それがあつたのです。いくらでも。その内容は、工学部という「日本の秘境」を、一般の読者に紹介する仕事である（このようなつまらないことをやるのは、日本広しといえども私だけである）。

突然死のチャンス

突然死のチャンスは、突然やつてきた。『工学部ヒラノ教授と七人の天才たち』（青土社、二〇一三）の最終校正を終えた二〇一三年三月三日の朝、六年前のクリスマスに発症した大腸憩室が再発し、大量下血したのである。

大腸壁に出来たくぼみ（憩室）が炎症を起こし、周辺の血管が破れて間欠的に出血するのが、この病気である（化膿して腹痛を起こしても、出血には至らないケースが多いそうだ）。

六年前の時は、夜半から朝にかけて六回の出血を繰り返したため、呼吸困難を起こした。翌朝東大病院に緊急入院した時には、赤血球が正常人の三分の二になっていた。もう一回出血していれば、ショック死した可能性もあつたという。

合計一六〇〇ccの輸血と、大量の止血材の点滴を受けたおかげで、四日目に出血が止まり、八日目に茶色の雲古が出た時には、白衣の天使だけでなく、神様、仏様にも感謝した。

(略)

翌朝はいつも通り四時に起き、サラダと紅茶の朝御飯のあと散歩に出たところで、急に便意を催した。タッチの差でウォッシュレットにたどり着いたところ、生温かい液体が勢いよく噴出した。恐らく、三〇〇ccくらい出たのではなかろうか。

慌てて東大病院に電話をかけて予約を取り、下着、洗面用具、ラジオ、携帯電話の充電器エトセトラをリュックにぶち込んで、タクシーを捕まえ、二度目の出血が起こる直前に病院に駆け込んだ。

当初の診断では、一週間程度の入院で済むだろうということだった。ところが思ったより重症で、出血はなかなか止まらなかった。どうしても止まらないときは、腸の一部を切り取らなければならないと宣告された私は、いよいよこれまでか、と覚悟を固めた。

“出来ることなら、**難病を患う娘**より先に逝きたくないが、お金さえ残してやれば、自分の役割は果たしたことになる

六日目に出血が止まり、二週間で退院と相成ったが、今回ばかりは主治医も、無理なことと刺激物（幸子蓮根はもとより、アルコール、からし、ワサビ、タバスコなど）を避け、血圧を下げる薬を服用するよう指示した。

校正と原稿書きに神経を使ったのと、厚切りの章子蓮根三切れが、出血の引き金になった可能性が高い。

「料理はサービス精神の問題なのよね」